

県北部地域における繭糸質の向上技術

(蚕試一戸分場)

1. 背景とゆらい

・若手県北部の繭糸質は、繭量が軽く生糸量歩合が低い等、本県でも低位にあるが、繭糸質の向上が強く要請されている昨今の情勢から、繭量、生糸量歩合に深い関わりをもつ4～5齢給桑量および用桑について検討し、成果を得たので参考に供する。

2. 技術内容

1) 5齢給桑量を慣行標準桑の20%増量することにより、繭量が7～12%、普通繭収量は12～16%増収し、生糸量歩合も24～27%増加した。

経済試算でも箱当たり収入で32%、桑園10a当たり収入で3%の増収となった。

2) 春切桑を晩々秋蚕以降の蚕期に給与すると、葉質低下により繭糸質が劣化するので、晩秋蚕までに収穫し、晩々秋蚕以降は夏切桑の給与体系とする。とくに葉の硬化が早いゆきしりごは、晩秋蚕期の早目に収穫する。

3. 指導上の留意事項

1) 5齢期の20%増量は、5齢中期以後に重桑を置いて給桑量を増量する。

2) 県北部では秋冷が早いので、桑葉の硬化あるいは震うとんこ病等により葉質が劣化しやすいので、晩々秋蚕および初冬蚕用桑は、しんけんもち、改良飛返等、硬化の遅い桑品種を用い、蚕期による使い分けを図ることが望ましい。

4. 参考文献・資料

若手蚕試要報(1982)第7号、東北蚕糸研究報告(1983・1985)第8・10号

昭和47年度・指導上の参考事項

5. 試験成績

1) 試験年次および場所

昭和68～70年 一戸分場・現地(軽米町)

2) 試験方法

(1) 4～5齢給桑量および蚕座面積と繭糸質との関係

供試蚕品種は、1983年晩秋蚕期に昭華×新生、1984年春蚕期に太平×長安、1985年初秋蚕期に秋光×竜白を用い、何れも4齢起蚕で各区200頭を供試した。試験区は、4～5齢給桑量を標準量、20%増量、10%減量とし、蚕座面積を標準、120%、90%としてこれを組合せ9区を設定した。飼育は1日2回給与の桑葉育とし、用桑は1983年晩秋蚕期および1984年春蚕期は改良飛返、1985年初秋蚕期はゆきしりごを用いた。

(2) 春切および夏切桑の晩々秋蚕給与試験

1985年晩々秋蚕期(7月4日掃)に、軽米町の現地農家において、改良飛返の春切桑給与区および夏切桑給与区を設定し、5齢期間中1日2回給与の桑葉育を行った。供試蚕品種は秋光×竜白を用い、1区1箱を供試した。

3) 試験結果

(1) 4～5齢給桑量および蚕座面積と繭糸質

① 繭量について給桑量との関係をみると、標準給桑量に対して20%増量区は、各蚕期とも繭量が重く、給桑量および蚕座面積の標準区に対して、7～12%重かった。これに伴って普通繭収量も増加し、標準区に対して12～16%の増収をみた。標準給桑量に対して10%減量区は、繭量が軽くなったが、その減少割合は比較的少なかった。

蚕座面積と繭重との関係は、面積を必要広くした場合、標準区より重い傾向を示したが、その差は少なかった。

② 繰糸調査をみると給桑量20%増量区は何れも生糸量歩合が高く、給桑量増量の効果がみられた。また20%増量区は繭糸長が長く、等級差が高い等総合的に糸質の向上がみられた。給桑量10%減量区は、生糸量歩合が若干少ない傾向を示した。蚕座面積と生糸量歩合については、明確な傾向がみられなかった。

③ 1984年春蚕期および1985年初秋蚕期の結果について、経済性を検討した結果、標準蚕座の場合、箱当たり繭価格をみると、給桑量20%増量区は標準区に比べ20%高くなったが、桑園10畝当たりの繭価格では標準区並みやや高い値を示した。

(2) 春切および夏切桑の晩々秋蚕給与試験

晩々秋蚕期の5齢期に、春切桑と夏切桑を給与した結果、夏切桑給与区は繭重が重く生糸量歩合が高かった。また、箱当たり収繭量も多く、箱当たり繭価格で春切桑に比べ20%高かった。

4) 具体的データ

図 4～5 齢期の給桑量および蚕座面積と繭重・普通繭収量・生糸量歩合との関係

